九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

筑前国怡土庄故地現地調査速報

服部, 英雄
九州大学大学院比較社会文化研究院 : 教授

https://doi.org/10.15017/1520164

出版情報：1999-12-31. 服部英雄研究室
バージョン：
権利関係：

3　九大移転予定地元岡とは中世にはいかなる場所だったのか

服　部　英　雄

その１　南北朝期、観応擾乱と本岡城郭

南北朝初期の元岡に関しては以下の三点の史料がある。

1　観応元年（1350）九月十一日足利尊氏充行状案（有浦文書、『南北朝遺文』二八四五）

2　貞和六年（1350）十一月　日僧進瓊申状（＊別紙に貞和六年十一月二十五日直冬安堵状、今津勝福寺文書、『南北朝遺文』二九三三）

3　文和二年（1353）卯月二日一色直氏寄進状（青柳文書、『南北朝遺文』三五四一）

（＊１、３および２の別紙は『九州荘園史料叢書』には未収録、３は元岡氏関連の史料だが、怡土庄の文言自身は登場しない。）

まず１には「筑前国本岡城郭・志登社領家・同地頭職を松浦佐志源蔵人披に充行う」とあって、「本岡城郭」の存在が知られる。観応元年は観応擾乱、すなわち尊氏と直義・直冬の対立のまっさ中である。本文書は案文であり、袖判の記主は不明とはいえ、観応年号を使用する宛行状は足利尊氏のものに違いなく、他の尊氏発給の文書（『南北朝遺文』二八八二、二九五五、三六四五、三六四六など）の形式にも完全に合致する。これらの地を宛行われた松浦党佐志氏は、尊氏方であり、反直義としての旗幟を鮮明にしていたと思われる。佐志氏の本貫は肥前国松浦御廚の佐志（現在の唐津市）なのだが、筑前国怡土郡内に一族の所領があった。仁治元年（1240）、肥前国佐志九郎増が怡土庄内篠原安恒村について妻女草部氏の相伝私領であると主張しているのは（広瀬正雄氏文書）、その一例である。佐志氏は有浦苗字をも名乗るが、怡土庄井田原を領有した伊田原氏は有浦氏の一族であって、松浦党のアイデンティティである一字名を名乗る。佐志氏の一族に寒水井（そうずい）（しょうずい）氏がおり、その一流が怡土庄高祖一帯の小地頭中村氏であって、同じく一字名を名乗る。そして中村文書（中村令三郎氏文書、広瀬正雄氏文書）を残した。いずれもみな松浦党佐志（有浦）氏の一族である。怡土庄は佐志氏の有力基盤であった（服部「怡土庄故地を歩く」＜『九州史学』一二〇＞）。のち観応三年（1352）十月頃には佐志勤は怡土郡長野庄にて、反少弐方すなわち一色方として軍事行動を起こした（由比文書、『南北朝遺文』三四七二）。

ここで「本岡城郭」のほか「志登社領家・同地頭職」が佐志披に宛行われている。じつはこの職は弘安九年（1286）以降、詫摩氏のものだった（詫摩文書）。詫摩宗直は直冬方として活躍した。直冬方筑後守護である。尊氏はこれを闕所とし、松浦佐志披に与えた。一方「志登社神宮寺免田」また「志登社堂田」とも呼ばれた「将軍家拝領地」一丁四反は、二ヵ月後に、直冬によって同じ松浦党の中村勇に宛行われた。松浦党の分断作戦だった。ただし勇の所職は一部で、詫摩氏のそれが惣地頭職ならば、小地頭職に該当するようなものだった。

つぎに２は今津勝福寺に残された勝福寺僧進瓊の申状である。貞和六年（1350）はいうまでもなく、この観応元年（1350）に同じ年である。貞和年号の使用からはもちろんのこと、別紙には足利直冬の安堵もあって、勝福寺が反尊氏＝直冬方（直義方）の立場をとったことが明々白々である（なお『九州荘園史料叢書』はこの文書を『太宰管内誌』より採訪しており、直冬の安堵状の記載を欠く。ここでは『南北朝遺文』によった）。ここで進瓊は「怡土庄内志摩方・友永方元岡井次郎名分目」ほかが勝福寺領であることを主張している。元岡を苗字とする元岡井次郎の政治的立場、つまり尊氏方だったのか、それとも直冬方だったのかは、これだけからは読みとれない。

次に３では三年を経過した文和二年（1353）に、一色直氏が「元岡兵衛次郎跡田地地頭職」を飯盛山

に寄進している。位署の部分を欠くのであるが、早く『筑前国続風土記拾遺』が指摘したように、発給者は一色直氏であろう。そのことは「殊将軍家御繁昌」の文言によって、将軍尊氏方にたつものの発給であることが確実であること、直氏がこの時期怡土郡を所轄していたこと（徳永文書、『南北朝遺文』三五四八、三五九四）、などから首肯できる。

本文書は飯盛権現の擁護を受けて合戦に勝利できたことを感謝しての寄進であるから、空手形ではないだろうが、この時代の「跡」は闕所を示すものと考えられるし、ますますの敵方降伏の意を込めたものでもあろうから、元岡兵衛次郎は反一色方＝反尊氏方すなわち直冬方であったと見たい。なお足利直冬は文和元年（1352）暮れ以降、南朝に下っていた（佐藤進一『南北朝の動乱』）。一色氏のライバルである直冬党少弐頼尚は、以後正平年号を使用する（『南北朝遺文』三五七二、三六五五、三七五八）。

以上三点の史料は観応擾乱のさなか、尊氏方や直冬方から今津、元岡一帯の利権に関して空手形を含む恩賞が盛んになされたことを語っている。「城郭」を宛行うという表現は、どちらかというと戦国時代を思わせる表現でもあり、いくぶん早過ぎる表現のようにも思われる。しかし、今津が軍事的な要衝であったこと、その地を直冬方＝少弐方が掌握していたこと、元岡はその奥まった位置にあり、また干拓進行以前の今津干潟においては、干潮時にも水路（河川）によって結ばれていたこと。すなわち水陸ともに後背地にあって、元岡兵衛次郎も直冬党だった、といった状況を勘案すると、怡土庄松浦党の分裂を利用し、それを促進する形で、尊氏が種々に画策し、なんとかしてまず元岡を掌握しようとしたことは十二分に考えうる。仮に元岡井次郎が一色方だとすると元岡氏にも内部分裂があったことになる。それをも上級権力は利用した。

「本岡城郭」がこの段階で本格的な「城郭」と見なしうるような完成したものであったとは考えにくいが、軍事的な要衝として重視されていたことは間違いない。

その２　元岡名と六郎丸名 ― 鎌倉期の名と地名 ―

嘉元三年（1305）の鎮西下知状（大友文書）に「六郎丸名・元岡名・川辺名・金丸名・桑原四郎丸名」等をはじめとして多くの名が列記されている。それらには元岡、桑原のように今日の集落名に名前が残っているものもある。

その元岡の小字に六郎丸がある。文献に登場する六郎丸名と元岡名は、ほぼ同じ場所に錯圃状態に混在していた。

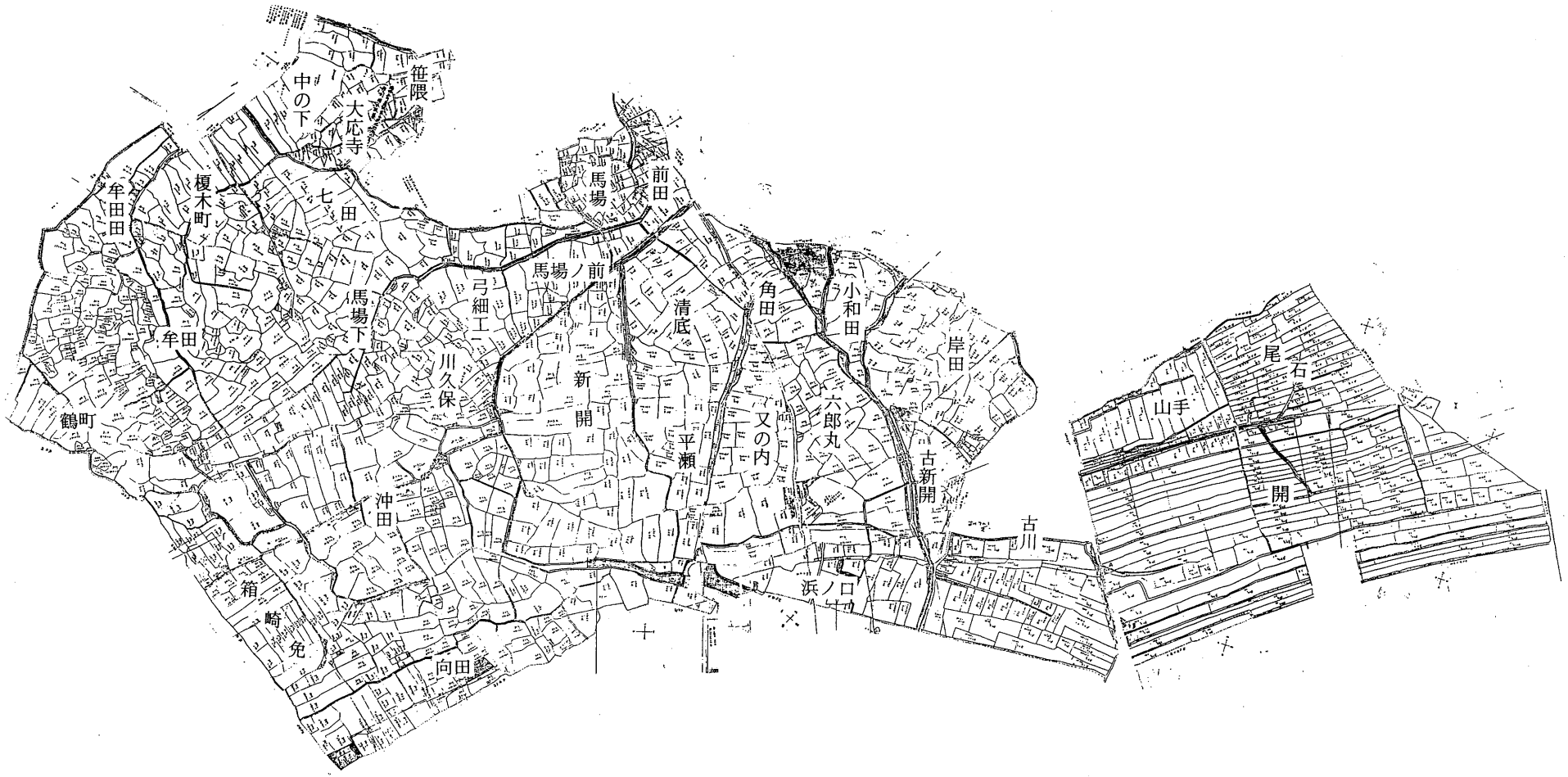
延慶二年（1309）重栄避状（中村文書）には

　怡土庄友永方　六郎丸内、元岡内、小廻田地一段六十歩

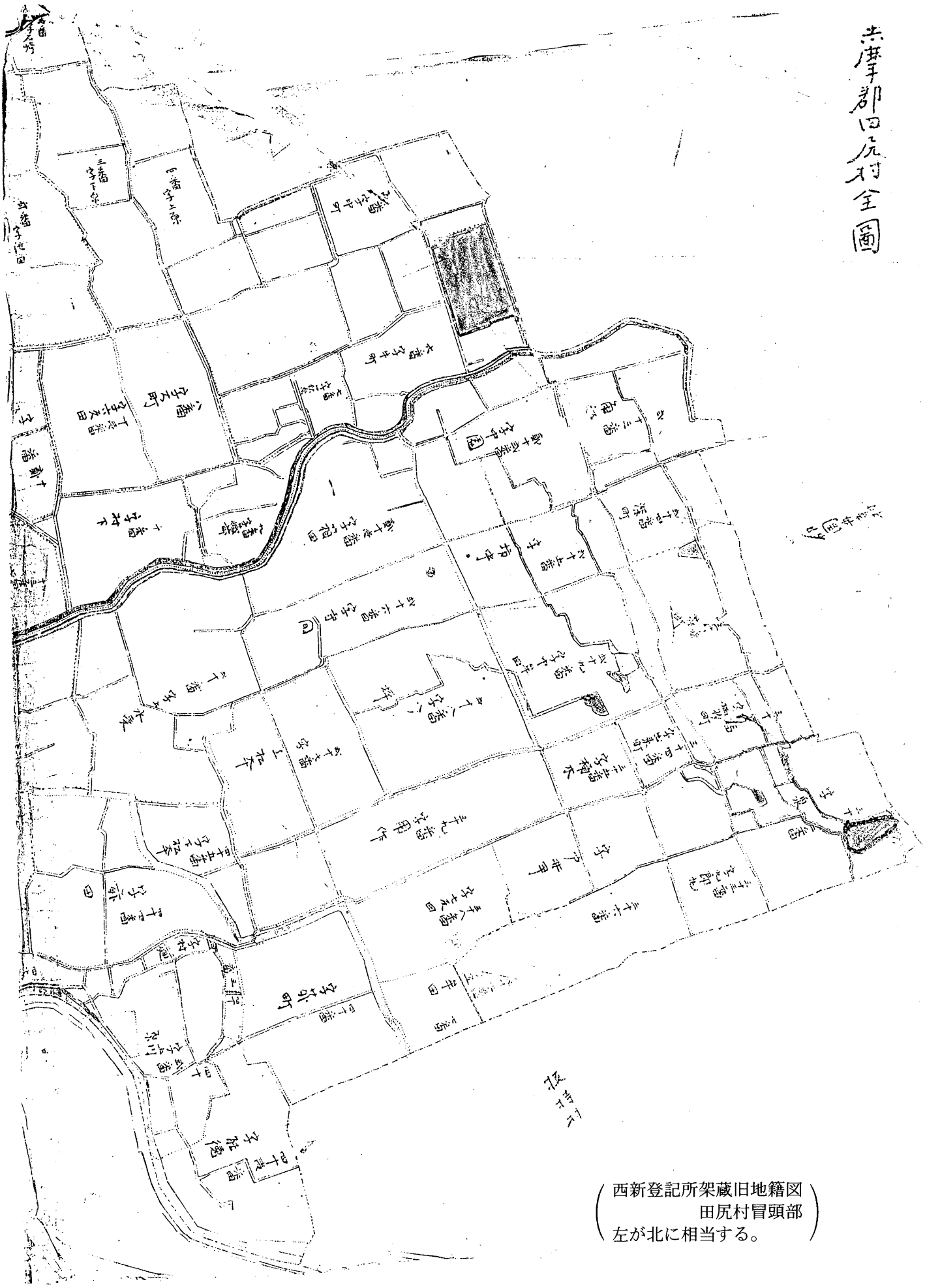
とある。やはり六郎丸名と元岡名が錯綜しているようだ。これによれば当時小廻という土地があったが、今も元岡の小字に米栗（こめぐり）がある。小廻が米栗として地名に残った。六郎丸名も元岡名もこうした土地の上に重層的に存在したのだろうか。

ところで明治十五年の小字名調（『福岡県史資料』）には六郎丸の字が記載されているが、いまの小字図には「六郎丸」という字名はない。明治末期から大正期にかけて行われた、きわめて早期の耕地整理の際、この字名は消えたのである。聞取調査ではこの「六郎丸」は聞いたことがあるような、という程度しか分からず、調査は難航をきわめた。しかし明治期の地籍図を、法務局西新出張所で閲覧することができた。「六郎丸」は今津干潟に臨む、弁天川低湿地に近接して存在していた。中世当時の開発拠点を示すものであろうか。

ほか元岡には「箱崎免」（天正十四年小金丸村指出に「箱崎分、香椎分」）や「弓細工」のような歴史的地名が多くある。いずれも給免田地名で、前者は神田免、後者は技術者への人給田であろう。



明治期の耕地整理以前の元岡の耕地（浜側平坦地の部分、山側と全体については11頁参照、全体は158頁図８を参照。）
法務局西新登記所蔵旧地籍図より合成、右上が北にあたる。一部欠がある。



（西新登記所架蔵旧地籍図
田尻村冒頭部
左が北に相当する。）

その３　地価帳による耕地整理以前の元岡・田尻の旧耕地の復原

さて上記のような理由で、元岡の内、かつての今津干潟に面した低平地については、聞取調査によって古い耕地景観を復原することは、すこぶる困難である。実際には不可能といってよい。しかし幸いなことに明治期地籍図は保存されていた。また九州文化史研究所には明治八年（1875）五月の地価帳が保存されており、近世末期にも近い時期の耕地の地価評価が分かる。これらを相互に対比することによって、一筆毎の地価評価が図上で復原できる。今一筆毎にその作業を行うだけの余裕がないので、ここでは小字と地目毎にその等級を分類し、上田や下田などの分布状況の大まかな傾向を見ることにしたい。なお元岡の耕地整理事業と同時期に、瑞梅寺川をはさむ対岸の田尻や太郎丸でも、その工事が行われた。ここでは元岡と田尻の二つの村を併せ考察しておきたい（以下地価表の小字と地目毎による等級の分類は別表を参照されたい）。

元岡の田の等級

まず元岡で良田（目安として一～四等田）が主体の字は、

角田、清庭、馬場下、馬場ノ前、前田、坂ノ谷＊、下ノ谷など（以下＊は田の筆数自体は少ないもの）、

中田（目安として三～七等田）主体のものは

古川、大久保、大坂、岸田、古新開、コハタ、六郎丸、浜の口、平瀬、又ノ内、新開、榎町、米栗、木ノ本＊、川久保、弓細工、抽ノ木、大応寺、二又、宮草、

下田（目安として七～九等田）主体のものは

開、山手、尾石、瓜尾、神子ヶ浦＊、菖蒲ヶ浦＊、向田、箱崎免、沖田、ツルマチ、ムタ、ムタクチ

となる。大半が一等田であるのは前田。一等田が一〇筆、二等田が二筆である。ここは集落に近接し、八坂神社の前に当たる。古い時代からの良田であり、有力者の所有するところだった。そこを中心として、馬場ノ前、角田、清庭など隣接する水田に元岡の良田が集中している。

地力の低い田は開、尾石、山手。これは旧今津干潟に近接する干拓地帯であろう。これに連続する弁天川流域は概して地味に乏しく、沖田、ツルマチ（鶴町）、そして今は弁天川の対岸になっている向田も悪い。箱崎免は名前からすれば良田のような気もするが、実態は七等田が三四筆、八等田が一九筆。沖田、向田に隣接する劣悪田であった。

同じ給免田でも弓細工は馬場ノ前に隣接し、三等田が主体だから、良田といってもよいぐらいだ。名の遺称と考えられる六郎丸は五、六、七等田が主体である。畑もあるから全くの低湿地ではない。中世には名主屋敷が存在したと考えたい。隣接して古新開がある。ここの田は皆六等田である。新開地名もあるが、三等田が一七筆もあり、生産力は高かった。開が近世後期の開発ならば、新開は近世初期、古新開は中世段階の開発田ということになるのだろうか。中世文書に登場していた米栗は、今は大半が池の敷地になっている。明治初期には中田が主体であるが、この時既に池は作られていた。

元岡の丘陵には奥ノ浦、菖蒲ヶ浦、神子ヶ浦、立浦など浦と呼ばれる小さな谷が連続し、水田も作られている。浦は筑前や豊前をはじめ九州には多い地名で、いずれも谷そのものか、または谷の入り口に位置する広い部分を指す。しかし地価帳に見る元岡の浦の田の地力はいずれも低かった。

田尻の田の等級

田尻の良田（目安として一～四等田）が主体の字は、

能徳、村廻、前田、新貝、町下、牛町、萩原、クラマエ、村下、ハコダ、ナカソノ、カクエ、イシザキ

などであろう。ぜんたい元岡よりは一等田が多いという印象がある。

明治八年五月地所取調帳（元岡）

元岡の字名	1等	2等	3等	4等	5等	6等	7等	8等	9等	その他地目	上	中	下	下々
開（田）						2	45	63						
開（畑）							1	18						
山手（田）					1	13	2	12						
山手（畑）						2	4	9						
尾石（大石）（田）								36	9					
尾石（大石）（畑）								2	2	弁天境内地1				
塩除（塩除田）（田）								1	1					
塩除（塩除田）（畑）		1		7		2	2	1	1	池1				
舟引（宅地）										宅地		5		
舟引（田）								1						
舟引（畑薮成）		1												
舟引（林）		2		1										
舟引（畑林成）		7	5	2						住吉神社境内1				
舟引（畑）			2		1		1	4	1	墓地2				
古川（田）					14	84	1	1						
古川（畑）						14	7	6	2					
水崎（田）						2			1					
大久保（田）				1	3	1	1	1						
大久保（畑）				5	2	4	1	19	20					
大久保（畑林成）			10	45										
石ヶ原（田）				1	1			3	1					
石ヶ原（畑）	1	1		5	6	4	9	10	11					
石ヶ原（畑）				7	5	4	5	6	11					
石ヶ原（畑林成）		1	8	23										
大坂（田）				1	2	2	3	2	1					
大坂（畑）					1	2	3		4					
大坂（畑林成）			5	1										
瓜尾（田）				3	5	1	3	5	1					
瓜尾（畑）					1	4	12	14	10					
瓜尾（畑林成）				19										
池の浦（池浦）（田）								1						
池の浦（畑）			1	1	2	2	9	16	19					
池の浦（畑林成）			15	30						宮崎神社境内1				
キシタ（岸田）（田）					8	25	7			墓地1				
キシタ（岸田）（畑）						2								
古新開（田）						17								
古新開（畑）						7		8						

元岡の字名	1等	2等	3等	4等	5等	6等	7等	8等	9等	その他地目	上	中	下	下々
コハタ（田）				3	7	2	2	1	1					
コハタ（畑）	1				3				1					
ケゴ（田）			2			2	3	8						
ケゴ（畑）				4	4	3	6	4	6	墓地 4				
ケゴ（畑林成）			9	6						池1				
堂ノ前（畑）	1		2		5		1	5	1					
堂ノ前（畑林成）				2						墓地1				
小坂（畑林成）		22	10	6						堂宇1				
小坂（畑）				3			3	7	3				3	4
小坂（林）		1	1							墓地3				
小坂（田）									1					
立浦（畑）							9	7	4	墓地 2				
立浦（畑林成）		6	3	9										
立浦（林）		1	1											
内野（畑林成）		3	14	4						墓地 2				
内野（林）		3	2											
内野（畑）						2	5	7	4					
内野（田）									1					
神子ノ浦（神子ヶ浦）（畑）				2	2	3	7	10	11	墓地 1				
神子ノ浦（同上）（畑林成）		1	5	15						白峯神社境内1				
神子ヶ浦（林）			2							池1				
神子ヶ浦（田）							1	3	1					
菖蒲ヶ浦（畑林成）		7	5	4										
菖蒲ヶ浦（畑）				3	9	4	8	5	4					
菖蒲ヶ浦（林）		1												
菖蒲ヶ浦（畑薮成）	1													
菖蒲ヶ浦（田）								1	1					
奥の浦（畑）				2	1	7	2	5	8	天神社境内1				
奥の浦（畑林成）			3	17	7									
奥の浦（林）				2	3									
永田（畑）				2		3				宅地	3	7	14	7
永田（田）		2												
坂ノ谷（畑）			1			2	2	4	4	宅地	3	7	14	7
坂ノ谷（畑林成）		18	6						1					
坂ノ谷（林）		3												
坂ノ谷（畑薮成）	2									日吉神社境内1				
坂ノ谷（田）	2													

元岡の字名	1等	2等	3等	4等	5等	6等	7等	8等	9等	その他地目	上	中	下	下々
下ノ谷（畑）		3		1		5	2	2	1	宅地	8	8	13	5
下ノ谷（畑林成）		29								寺境内	1	1		
下ノ谷（田）	5	1	1						3	鵜萱神社境内1				
下ノ谷（畑薮成）		2								墓地2				
下ノ谷（林）		7												
角田（田）	1	1	3	4										
角田（畑）		2	3	2										
六郎丸（田）				6	10	26	4							
六郎丸（畑）						3		7						
浜の口（田）						18	2	1	1	池1				
ヒラセ・平瀬（田）			1	1	2	4	5	2	10					
ヒラセ（畑）							3							
又ノ内（田）			2	5	7	5	1	7	9					
又ノ内（畑）						4	6							
清庭（田）	1	5	13	6	11	1		1						
清庭（畑）						1	10							
新開（田）			17	5	33	13	1							
新開（畑）							1							
向田（田）						1	87	17		池2				
箱崎免（田）							34	19	1					
沖田（田）					9	7	47	17						
牟田（田）							1	12						
ツルマチ（田）								51						
ムタクチ・牟田口（田）						7	16	8	1					
ムタ（田）						7	20	89	6					
ムタ（畑）						1								
榎町（田）					1	16	2							
榎町（畑）						1	2							
米栗（田）			1	6	4	3	14			池				
米栗（畑）								2	1					
木ノ本（田）			1	5										
木ノ本（畑）								1						
抜町（田）						1								
馬場下（田）		3	11	17	16	12	5	1						
川久保（田）				5	7		12							
弓細工（田）			10	3	1									
馬場ノ前（田）		23	6	2										

元岡の字名	1等	2等	3等	4等	5等	6等	7等	8等	9等	その他地目	上	中	下	下々
原内（田）					1			1						
原内（畑）		2	17	2	3	3	1	1	9					
原内（畑林成）			7							墓地1				
抽ノ木（田）					8	3	2	1						
抽ノ木（畑）		3	9	2	4	5	3	4	6					
抽ノ木（畑林成）		7	3	2						墓地6		7	5	
抽ノ木（畑薮成）	1	3												
抽ノ木（林）		3	3							宅地	1			
馬場（田）			2		1					宅地		9	10	3
馬場（畑）		1	1			4	2	4	1	墓地1				
馬場（畑林成）		1	1?											
前田（田）	10	2												
笹隈（畑）				1	1		1	3	1	宅地		2		
笹隈（畑林成）			1							笹隈神社1				
笹隈（田）						1								
大応寺（田）					1	3								
大応寺（畑）	1		5	2	1	15	3	4	4					
中の下（田）			6	7										
二又（田）				3	5	1	1	1						
二又（畑）						3	4	10	14					
二又（畑林成）				11										
二又（林）				2						池1				
宮草（田）			1	2		1		1						
宮草（畑）	1		6	1	1	2	7	12	6					
宮草（畑林成）			4	8						宅地			1	
宮草（林）			1											
広セ（田）						1	2	1						
広セ（畑）	1	2	8	8	2	2	4	5	5					
広セ（畑林成）		5	3	6						墓地3				
広セ（林）		2												
広セ（畑薮成）			2											
峯（田）								4						
峯（畑）					2	2	1	6	6					
峯（畑林成）			14	6										
谷蟹（畑）						1	2	12	3					
谷蟹（畑林成）			1	6	4									
谷蟹（林）			1	2										

田尻地価帳

田尻の字名	1等	2等	3等	4等	5等	6等	7等	8等	号外8等下	その他地目	上	中	下	下々
能徳（田）	19													
能徳（畑）	18									墓地1、薮1				
上川原（宅地）										宅地	28	1	1	
上川原										五道神社境内1				
村廻り（田）	1	6	2					1		池				
村廻り（畑）	4			1										
前田（田）		12	13	2										
古川（田）		6	1							宅地		5		
古川（畑）		5	1											
新貝（田）	9	8	13											
新開（畑）	4	4	7											
中川原（田）		5	14	17										
中川原（畑）		10	36											
御足長三郎（田）				46	20			2	1					
御足長三郎（畑）			47							荒蕪地･地価村持1				
御足長三郎（宅地）										宅地	2			
梶町（畑）			1											
新高（田）					1	16	19	2	1	荒蕪地1、田荒1				
新高（畑）			2	13										
東ダイチ・東代地（田）				6	12									
東ダイチ（畑）			8											
西ダイチ（田）				9	26	1	1							
西ダイチ（畑）			3	15										
町下（田）	20	9	27	10	2									
町下（畑）			38							宅地	2			
ナガヨリ（田）				4										
ナガヨリ（畑）			5							宅地	1			
北浜新高（田）					15	16	17							
イシザキ（田）		14								宅地	16	8		
イシザキ（畑）	2	14	6											
イシザキ（薮）			2											
イケダ（田）			9	12	15	1				宅地	3			
イケダ（畑）	3	3	5											
西下原（田）				1	8	1								
東下原（田）				2	5									
東下原（畑）			3											
東上原（田）				13	2		1							
東上原（畑）	5	1	1											
西上原（田）				3	3									
牛町（田）	5	2	3	4	7					池1				
牛町（畑）		11	13							宅地	6			
萩原（田）	6	3	5	5	4					宅地	4			
萩原（畑）		1	5							天降神社境内1				
大町（田）		2	5	7	1									
大町（畑）		2	1											
クラマエ（田）	8		1							宅地	1			
クラマエ（畑）		3	12							寺境内	1			
クラマエ（薮）			1											

田尻の字名	1等	2等	3等	4等	5等	6等	7等	8等	号外8等下	その他地目	上	中	下	下々
村下（田）	7	2	7	1										
村下（畑）		1	5							宅地	5			
六反田（田）			3	12	1									
新貝・シンガイ（田）			1	11	21					墓地1				
下新貝（田）				3										
下新貝（畑）			1											
畑田（田）		1	11	5										
畑田（畑）			10											
町（田）	1		2							宅地	23	9	4	
町（畑）		3	3							池1				
町（薮）			4											
下水受（田）				8	7	16	41		1					
下水受（畑）			4	1										
アミノウチ（田）				9		2								
アミノウチ（畑）			12					9						
下松本（田）				4	4	5								
上水受（田）				8	5	6		2						
上水受（畑）			3	5						宅地	3			
上松本（田）				11	10	11								
上松本（畑）			1	2										
ハコダ（田）	10		6	2	1	6				宅地	4			
ハコダ（畑）		4	8											
ナカソノ（田）	3	2	8	4	5									
ナカソノ（畑）		1	6							宅地	5			
カクエ（田）	2	8	15	3										
カクエ（畑）		16	19											
フカマチ（田）			2	3		3	8							
ボヲチウ・坊中（田）							44	1						
テラマ（田）					1	6	4							
ハチノツボ（田）						4	33	9		田荒2				
ナカムタ（田）						2	23	6	7	田荒2村持(十ヶ年引)				
アシマチ（田）					11	9				池1村持				
ヨウサク（用作）（田）				4	14	14								
ヨウサク（用作）（畑）			1											
楠木（田）					3	3	2	2						
デキ町（田）				1	1	4		2						
柄杓町（田）				14	12					宅地	1	2		
柄杓町										池・村持				
泉（田）			1	2	3	10	4			池3・荒1				
泉（畑）		3	1							宅地	3			
下泉（田）					8		3							
クロオマル（田）					8									
トキデ（トイデ）（田）					6	3	7							
トイデ（畑）			1											
深町（田）						5	14		1	荒1				
七反田（田）							17		1					
タテムタ（田）							9	1						
カリマチ（田）			19	3										

中田（目安として三～七等田）主体のものは
中川原、代地、イケダ、下原、上原、六反田、新貝、畑田、用作、柄杓町、泉、下泉、クロオマル（九郎丸）、カリマチ、御足長三郎
中田から下田にかけて、つまり中田もあるが下田も多いというのは
水受、松本、そしてテラマ、楠木、デキマチ、トイデ、
大半が下田（目安として七～号外八等下）が
新高、北浜新高、坊中、ハチノツボ、深町、七反田、ナカムタ、タテムタ
となる。

まず能徳は中世の名にも登場する。嘉元三年（1305）の鎮西下知状には
「能得名々主能得三郎太郎入道々盛」
がみえている。能徳という小字名は高田にもあるが、実際は田尻の能徳に隣接している。田尻のそれは瑞梅寺川に面し、土砂運搬による自然堤防的な肥沃地にあるのだろう。村廻、前田など一等田が集中する。

田尻の水田を地形上において考えてみると、南部耕地は大生水（オオショウズ）、小生水、新生水などの湧き水を灌漑水源とする掛かりであって、開発は古く、かつ安定水田であったと推定される。しかしこの湧水点が連続する地帯の地力は低い。楠木、出来町、八ノ坪、坊中等は一様に悪い。少し離れた柄杓町、深町、泉などは比較的よい。中牟田の地名が示すように、地下水脈が浅く、楠木から坊中にかけては強湿田になっていたのであろう。

八ノ坪は条里制の施行を示す地名で開発は古い。隣接して領主直営田地名の用作がある。悪田に隣接していることになるが、四等が四筆、五等が一四筆、六等が一四筆だから、中程度の地力だった。さらに西に隣接する戸井手や七反田も良くはない。周船寺川と瑞梅寺川の流路間ではましな方の水田だった。用作は湧水によって灌漑する水田の中では良田の方だった。

4　波多江氏館と早稲米献上　―領主直営田と勧農のイメージ

服　部　英　雄

波多江の築地に波多江丹波守館跡があり、現在波多江佐二氏が住んでいる。北から西にかけて堀の跡が残る。かつて今宿バイパス建設時に館の南方で事前調査が行われ、史料調査も行われた（福岡県教育委員会『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告　波多江遺跡　第六集』。1982）。早稲米献上について氏から聞き取りをした内容は次のようなものである。

館の中に僅か三畝ぐらいの田があり、殿様黒田氏への献上米を作った。おそらく筑前内で一番早くできる米で、その早稲米をわずか三合ほど献上する。献上のおり殿様と相対で酒を酌み交わすこともあった。早稲は赤米のように毛のある米。米自体は丸く、赤米ではない。香り米。混ぜて炊くと「わせ米のはいっとうけんおいしかなあ」っていう米である。収穫米の中からよい米を選り分ける。臼でついて傷のない物。献上米だから手で選り分けることはできない。竹べらで選り分ける。早稲田は神聖、田鋤（田耕）の時牛のうんこをのけにゃあならん。子どもがそこで小便でもすれば「だれがしょんべんまりよるかあ」ってすぐに叱られる。**近所の人が田植えを手伝いにくる。**しかし反対にその人達の田植えを手伝うことはない。ゆいのような相互扶助ではない。

献上した残りは近所の人たちで分けるが、種籾は保存しておく。田植えの時のお弁当、（その種籾の